りびんぐらいぶず　平成29（2017）年3月第3号

のんのんのんの　のんのさま

◆ご讃題

如来大悲の恩徳は　　身を粉（こ）にしても報ずべし
師主知識の恩徳も　　骨をくだきても謝すべし

（Ref『正像末和讃』「第五十九番」註釈版聖典 P610）

◆はじめに

幼いお子たちのおうちのご法事では、「のんのさま」のお歌で御法話をさせて戴きます。
幼い頃、私達は、仏様のことを「まんまんちゃん」と申しました。
祖父母に手を引かれ、道端のお地蔵さんにも「まんまんちゃんあん」とお参りしました。
「のんのさま」は、「まんまんちゃん」のいま一つの呼び名です。

◆のんのさま

のんのさまは、こういう歌詞よりなります。

一、ノンノンノンの　　のんのさま　　このこのいのち　　まもりゃんせ
このこのあした　　まもりゃんせ　　このこのみらい　　まもりゃんせ

ノンノンノンの　　のんのさま　　このこのともだち　　まもりゃんせ
このこのちきゅう　　まもりゃんせ　　このこのゆめを　　〇まもりゃんせ

ななつのうみに　　はしかけて　　世界をつなごう　　手をつなごう
はしははしでも　　にじのはし　　世界のこどもが　　あそぶはし

〇は一拍開ける印です。**（東村 美穂 作詞、中村 八大 作曲）**

ところで、**「この子」**とは一体誰のことでしょう。**「まもりゃんせ」**とはどういう意味だったのでしょう。この歌を歌う度に、私は、たびたび反問して参りました。

常識的に云えば、**「この子」**とは、母からみてのわが子だったかとうかがわれます。

でも、今生の母自身は、生身の身体ですから、この子の赴く、何時、如何なるところへも母親自身は、付き添っては行けません。たとえ付き添って行ったとしても万能ではありません。

でも母の願いだけは永遠に繋がるものがあります。わが子を戦地に送り出してきた母、不自由にして誕生したわが子の将来を案ずる母にとっては、その願いは仏様の大悲に通じます。

「お守り下さいませよ」とは、そんな母の願いではなかったかと窺うことができます。

でも、仏のご加護をお願いするだけでは本物ではないように思われます。

なぜなら、阿弥陀如来の本願力は、仏様の方からの先手の働きだったからです。

仏様先手の働きにまなこを洗われて「**お任せ申します**」というのが「**弥陀をタノム**」浄土真宗のおみのりであり、妙好人の姿だったからです。

歌詞の第三聯は、平和そのものの橋だと受け止めることができます。世界の平和が子供の安穏を願う母の願いだったのです。

◆のんのさまの歌を歌うほどに、いつしか、私は、まだ見ぬ歌詞を待ち望んでいました。

そうして当院でご縁を結んで誕生して下さったのが二番の歌詞だったのです。

二、なもあみだぶつ　なもあみだ　なもあみだぶと　となえませ
なもあみだぶと　たたえませ　なもあみだぶと　きかしゃんせ

なもあみだぶつ　なもあみだ　なもあみだぶと　はかりませ
なもあみだぶと　たのまんせ　なもあみだぶと　〇めざめませ

ななつのうみに　はしかけて　世界につなごう　みだのはし
はしははしでも　ろくじばし　みだのじょうどに　わたるはし

（南無阿弥陀佛版　りびんぐらいぶず補作詞）

二番は、親鸞聖人のお念仏のみ教えのお心を謳い上げたものです。

◆「**となえませ**」とは、「さあ、称えてごらん」と称名念仏をお勧め下さる如来様のお心をあらわしています。これは、六字釈は、発願廻向釈に基づいています(Ref 註釈版聖典 P170)。

◆「**たたえませ**」とは、「お名号のお徳をお讃えなさいませよ」という意味であります。

「お讃えする」とはどういうことか？

煩悩成就の凡夫には、如来様の深いお心はわかりません。其れでは、とてもお名号のお徳をおたたえ申すことはできません。片言でお讃えするなどおこがましい限りです。

ところが、親鸞聖人は、愚かな身であっても、如来様から賜るお念仏を称えること自体がお讃える（讃嘆する、讃仰する）ことになると明らかにして下さったのです。

それが如来様のお心だったからです。

如来様から本願力回向されたお念仏をおとなえすることがそれがそのままお名号のお徳をお讃えすることになるのであります。

これは、仏説無量寿経は第十七願のお心であり、直接的には、尊像真像銘文第八条の御文に基づいています(Ref 註釈版聖典 P655)。

◆「**きかしゃんせ**」とは、「お聞きになって下さいませよ」という意味であります。

字数を合わせて詩に謳い上げる関係上、こんな表現をとっていますが、北原白秋の柳河風俗詩にその用例があります。

では、聞くとは何を聞くのでしょう。

お念仏を称えれば直ちに聞こえて下さるものがあります。
南無阿弥陀佛と称えれば、南無阿弥陀佛と聞こえて下さる。
如来様から頂戴したお念仏をおとなえしたのですから、聞こえて下さったものこそは、如来様そのお方の本願のお心からのお喚び声（勅命）だったのです。
これは、親鸞聖人の六字釈に基づいています(Ref 註釈版聖典 P170)。

◆**「はかりませ」**とは、どういうことか。
なもあみだぶつのお名号は眞実の世界の基準となる秤であります。
わたしたちは嘘偽りの世界の真ん中で苦悩していますが、如来様のまことのお心を頂戴したからには、これからは、人生をお名号の眞実を基準として生きていきましょうという意味であります。一念多念文意第二十一条の御文に基づいています(Ref 註釈版聖典 P694)。

◆**「たのまんせ」**とは、どういうことか。
たのむという言葉は、もともとは、おまかせするという意味だったのです。
ところが、十五世紀中頃に浄瑠璃が現れた頃から、「お願いする」という意味が現れ、寧ろ、今日では、それが主流になってしまいました。
ここでは、もともとの「おまかせする」というもとの意味に立ち返って頂戴することが大事であります。

◆**「めざめませ」**とは、どういうことか。
如来様が願うて居て下さるのですから、その如来様のご本願のお心からのお喚び声にめざめさせて戴きましょうという意味であります。

◆**「みだのはし」**とは、どういうことか。
如来様のお国に渡らせて戴く橋であります。
このため、如来様は、南無阿弥陀仏のお六字をご用意戴きました。
お六字は、お名号の最も簡単なお姿です。漢字で僅か六文字、如来様がご本願叶ってお六字に姿を変えて私達衆生に届いて下さる。
如来様が私達にせまって下さる、お救い下さるときのお姿をお六字と申します。
「六字橋」とは、そのお六字の働きを申すのであります。
お六字の働きによって、衆生は、如来様の大悲の世界、弥陀の浄土に渡らせて戴くのです。

◆よかったねえとお姉ちゃんが言いました

三村さんのご法事は、二月五日でした。
仏説無量寿経の最後のご和讃、讃阿弥陀仏偈和讃第三十番の文字が私の目に飛び込んできて下さいました。頂戴したお心は、先にご紹介しております（Ref りびんぐらいぶず 3月第1号）。
そのご法座の最中に記念すべき出来事が起こりました。
まだ一歳にも満たないのに、次女のあずみちゃんが、のんのさまのお歌に目を輝かせ嬉々と

した風情で聞き入って戴き、初めての寝返りを打ったのです。
五歳のお姉ちゃんが「よかったねえ」とたたえました。
私達は、「如来様の子供でよかったですねえ」と御法話を喜ばせて戴いきました。合掌。
(後書き)「のんのさま」の二番の歌詞の第一聯は、新発意が南米開教区へ赴任して以来、こつこつと確かめてきた「聞名ループ」という研究成果に立脚しています。

既に不肖も若くはありませんので、その成果を次世代の皆様と共有する為に**「伝道教学の可能性」**と題して、この程研究発表し、論文投稿させて戴きました。

念の為、不肖の乏しい読解力で江戸教学以来の学派教学まで振り返らせて戴きました。本来ならば各学派のお考えを引き継ぐお一人お一人の人格に接して本願招喚の勅命との関わりを確認させて戴くのが理想でしたが、既に今生に先学はいらっしゃいませんから確かめる術もありません。

ですが「聞名ループ」に相当する同様なコンセプトは従前にはありませんでした。
従前の教学は、名号と信心と念仏との関係性に集中したものであり、聞名を契機とし、称名は、聞名を目指すものであるとするプラクティカルな超熟の体系学ではなかったからです。

のんのさま第二番は、それが伝道の実際にどのように反映されるかを適用した一例です。
歌詞そのものは、三年も昔に誕生しましたが、**「となえませ」→「たたえませ」→「きかしゃんせ」**の**「聞名ループ」**は、平成 18 年以来の乏しい研究成果によって漸く確認されたのです。

皆様方の中には、浄土真宗では「信心」一つでお救いに与ると聞いてきたが、その「信心」はどうなったのかと訝られるお方がいらっしゃるかも知れませんが、如来様の仰せに「さようか」と頭（こうべ）を垂れる（是を信心の相と申します）ことが浄土真宗の信心だったのです。

ですので、「聞」の一言の中に、「信心」も織り込まれています。「聞即信」だったからです。

如来様から賜ったお念仏をお称えすることがそのままお名号のお徳をお讃えすることになるのであり、称えれば直ちに聞こえて下さる「南無阿弥陀佛」こそは、如来様そのお方のお喚び声（本願招喚の勅命）でありました。

「聞」には、初めてみ教えをお聞きするときから、終に、衆生が如来様のお喚び声をお聞かせに与っていると知らしめられるときの「聞」までの道行きが含まれています。

従前の教学は「信心獲得のそのとき（究竟位）」に片寄りすぎていましたが、初めてのご縁のお方にもお育てに与って戴きたい、そういう教学があって欲しいとの想いでお訊ねして構築してきたものです。

ごくごく最近になって、初期無量寿経の「聞」は、実はそうした人たちに仏教のご縁が開かれるものであったという事実をお知らせに与った次第であります。合掌。

◆正覚寺永代経　三月四日(土)十三時半より
◆宗祖七百五十回大遠忌実行委員会　三月五日十九時
◆仏教婦人会例会　三月十六日(木)十九時半より

著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内)〒520-0501 大津市北小松四五二番地
TEL077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥